

暗い波濤

下卷

阿川弘之

新潮社版



暗い波濤 (下巻)

昭和四十九年三月二十五日発行
昭和四十九年六月十日三刷

著者 阿川弘之 (あがひろゆき)

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号一六二 東京都新宿区矢来町七一

電話東京(二六〇)一一一一 振替東京八〇八

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

定価九八〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替へいたします。

暗い波濤

下卷

第十四章

一

軍務局勤務の三人の主計大尉は、そろそろ時間だといふやうに顔を見合せ、書類を片づけて立ち上つた。

壁の時計が十一時をさしてゐる。けふ海軍大学校卒業式行幸の帰途、陛下が大本営海軍部にお立寄りになる。鹵簿御到着の三十分前であつた。

窓の外には春の牡丹雪がしきりに降つてゐた。

鏡の前でちよつと容姿を点検し、白手袋を手に階段を下りて行くと、別棟の第五分室から、特務班の中少尉連中が雪をかぶつて続々本庁一階の廊下に入つて来るのが見えた。三人の大尉は、他の部局の主計科尉官や、特務班士官といつしよに奉迎の位置についた。

燃料不足で暖房のきかなくなつた海軍省の古い建物の廊

下は、底冷えがする。

「なあ保科。お互ひ内地の雪もけふが見納めだぞ」

と国分大尉が言つた。

「天ちゃんのお顔も見納めだよ」保科主計大尉が小声で答へた。「見初めの見納めさ。これでも俺はけさ、下着を全部取替へて来たんだ」

もう一人の芦屋主計大尉は、出て行く二人の同期生の氣持を察して黙つてゐた。かういふ時機に海軍省に天皇をお迎へするといふ異例のことがどういふ意味合ひを持つてゐるのか、芦屋大尉には分らなかつた。

今回の異動で自分だけが前線行き命令を受けなかつたことも、彼は不審に思つてゐた。

軍務局員の中佐から、

「君たちは最高学府で政治学や法律經濟を勉強して来た者として、現下の戦局政局に関し、色々考へるところがあらうと思ふ。一度時局についての君らの個人的所見を対策のかたちで出してみてもらひたい。これは局長ちきぢきの要望なので、諸君が何を書いて来ても、咎めを受けることはないから」

と、少し風変わりな作業を三人が命ぜられたのは先月初めのことであつた。国分大尉や保科大尉は、

「あんなこと言つてたつてあてになるもんか。踏み絵にさ

れるおそれがあるから氣をつけた方がいいぞ。危い危い」と笑つてゐたが、芦屋大尉はこの時かなり思ひ切つたレポートを書き上げて提出した。

少し前に、新聞の竹槍事件といふものが起つた。毎日新聞の海軍担当記者が「勝利か滅亡か。戦局は茲まで来た」「竹槍では間に合はぬ。飛行機だ、海洋航空機だ」と大見出しの解説記事を発表し、これが東條総理の忌諱に触れて毎日新聞は即日発売禁止処分、記者は突然四国の聯隊に一兵卒として召集されてしまつたのである。

芦屋大尉はこの時、報道部人事局あたりを中心に、海軍が何とかその記者を救はうとしたのを知つてゐた。それは書かれた内容が航空機材の配分に関して海軍に都合のいいものだつたためではあるが、それにしても日本敗戦の可能性をかなり露骨に匂はせた新聞記事をめぐつて、海軍の示した反応に彼は興味を持つた。率直に意見を求められた時にはこちらも率直に答へて大丈夫らしいと、その折の印象が頭にあつて、芦屋大尉は先づ、大臣の総長兼任問題について自分の意見を書いた。トラックが大きな被害を受けた直後、陸軍大臣を兼務してゐた東條首相は自ら進んで参謀総長を兼任した。同時に海軍大臣の嶋田大将が軍令部総長を兼務することになった。政府は「国務、統帥の高度の緊密化」などと説明してゐるが、大学で憲法を学んだ者とし

ては憲法上の疑問を感じずにはゐられない。各新聞が「憲法上の疑義なし」と解説を載せてゐるのも、疑義があるからではないか。

それから、この大戦の前途も、いくさが畢竟近代国家間の外交上の一段である以上、収束の方法はどうするのか。かりに一億国民がみな命を投げ出して玉碎しても、それでは残つた皇統を守ることが不可能になる。開戦時あれだけ巧妙なタイミングをつかんだ帝国海軍が、終戦の時機について何も考慮してゐないのは、これまでの戦果を生かし忠節を全うする所以でないと思ふと書いた。

この「所見」は、古い外務官僚で戦前外交評論など書いてゐた伯父芦屋烈の影響を多分に受けたものであつたが、提出後彼は別に叱られもしないかはり讃められもしなかつた。

軍務局長が読んでくれたかどうかについても一向話は無く、自然に忘れてゐたところ、芦屋は公報を見てふと、「海軍少将津島雄介補軍令部出仕兼海軍省出仕海軍技術会議議員海軍次官承命服務被仰附」といふ辞令が出てゐるのに氣づいた。

わけの分らぬ長つたらしい辞令であつた。

大臣の総長兼任問題の際、津島少将は非常に強硬な反対意見を表明したと言はれてゐる。もともと親英派として注

目されてゐた人で、次官承命服務とは單なる左遷ではなく、当分次官の監視下に置かれる意味だといふ噂が聞えて来た。芦屋はいささか不安になつた。少将が総長兼任問題を批判して監視を受けるとすれば、主計大尉はまづ前線放逐が落ちであらう。

芦屋は主計科短期現役の第五期生で、大学の法学部を出、海軍経理学校の補修学生教程を了へて、最初特設砲艦盛京丸の乗組になつた。

朝鮮郵船のボロ貨物船を徵用した「見敵必沈」と称する盛京丸の上で十二月八日を迎へ、其の後軍艦千代田の主計長、第二十一驅逐隊主計長と、長い間洋上で生活した。ミッドウェーにも行つたし北方作戦にも参加した。ミッドウェーで母艦の乗員を大勢救助した時、軍医長が、「天皇陛下万歳を叫ぶ奴は、軍医から見ればみんなかすり傷だ。ほんたうに死にさうなのは何も言ひやせん」と言つてゐたのが印象的であつた。やつと陸に上つて軍務局派遣勤務にしてもらへたのが昨十八年の四月で、あれからそろそろ満一年になる。別に越度が無くても、二度目の前線行きの順番がまはつて来る頃であつた。

一度覺えた潮の香がなつかしくないこともなく、出されるなら出ようと覺悟を定めたつもりで待つてゐたら、同室の国分大尉が軍艦矢矧の主計長、保科大尉が第三十三警備

隊主計長に発令になつて、芦屋大尉は取残された――。胸にたくさん勲章を飾つた将官たちが次々に階段を下りて来る。高松大佐宮の顔も見えた。話し声がやんで、列は静かになつた。

十一時半ちやうど、正面玄関に護衛のサイドカーがきしんとどまる音がすると同時に、「君が代」の奏樂が起つた。最敬礼をしながら、彼は上眼使ひに、入つて来られる天皇の姿を盗み見た。

海軍第一種軍装の大元帥陛下は、顔色が透きとほるやうに青白かつた。諸官をしたがへ、ゆつくりした足取りで静かに階段を昇つて行かれた。

しばらくして「開ケ」になつた。

お偉方はこれから二階で大膳職の用意した屋食のお相伴にあづかる。それ以外の者は別棟の食堂で、百貨店のランチのやうな祝膳が出る。

雪は依然として降つてゐた。

海軍省構内の高等官食堂は、最近娑婆の大学の学生食堂のやうな景観を呈してゐた。鎮守府から派遣勤務の主計科士官、軍医、予備学生出の中少尉、艦政本部あたりの技術士官、本職の海軍将校の方が数が少い。

軍服の雪を払ひながら入つて来たこれら若い連中は、勤務はちがつても大学高等学校の先輩後輩といった関係が多

く、食卓越しにお互ひ「やあ」とか「おう」とか言ひ合つてゐる。

芦屋主計大尉は特務班の尉少尉じようじゆうを認めて立ち止ると、

「おや、貴様かういふ日でも一般士官並みか？ 御陪食ぢやないのか？」

と聞いた。何年か前、伯父のところの外政問題研究会の席で、西洋史学科の一年生の尉とよく一緒になつたことがあつた。

「そんなことはありません」

尉少尉はいやな顔をした。

外務省に籍のある特務班の権藤少尉が、

「あいつ、芦屋烈の甥だろ？ 大した秀才ださうだが、軍務局が何かで副官面しやがつて、仕事は何をしてるんだ？」

と、ハムをかじりながら小声で悪口を言つた。権藤は同じ法学部を出たのに主計科の短現になりそこねたのでこの連中に少し反感を持つてゐる。

保科主計大尉が特務班のテーブルに寄つて来た。

「おい、権藤、俺いよいよ出るこゝになつたぞ」

昔サッカーをいつしよにやつてゐた権藤は、

「へえ、何処だい？」

と、ぞんざいな口をきいた。

「うん？」保科大尉はそれには答へず、「陛下のお顔も見だし、まあ元気でやつて来るよ」と笑つてみせた。

「とんぼ蝶々もいよいよ戦争に行くかね。俺たちの方ぢやあ、近く此奴と此奴が出て行くんだ。主計科は物ものを持つてゐるからな。何かの機会にはよろしく頼みますぜ」

権藤は竹中と尉の二人を保科大尉に紹介した。

「生意氣言つてやがる。——どちら方面ですか？」

保科は竹中に向つて訊ねた。

「私は北方です。貴様はチンチン、——これだよな」

竹中少尉は尉の方に向いて内火艇チャージの真似をしてみせた。艦隊といふ意味であつた。

「君、艦隊か？」

傍に立つてゐた国分主計大尉がにやつとした。

此の戦争の天王山になる艦隊決戦が起るのは、今年の七月だらうとの噂で、それを前に、各部に転勤の季節が来てゐるやうであつた。

「あああ、俺も陛下の顔は拝ませてもらつたし、殿下に屁も聞かせたし」

竹中が、あとは独り言のやうにブツブツ言つた。

海軍省の士官便所に「殿下用」といふのが一つあつて、軍令部一部一課の高松宮が時々入つて来られる。竹中は一度そのとなりにこもつてゐて、用便に來た殿下の方に大き

な屁を放つたと先達てから吹聴してゐた。

「しかしな、権藤」と、保科大尉が言つた。「俺はけふ陛下のお顔がひどく青白くて、あんなに青い顔をしてをられるものかとちよつと驚いたぜ」

「そりやさうですよ」権藤は答へた。「兵隊が毎日々々自分の名前を呼びながら死んで行くんだから、天ちゃんだつてたまつたもんぢやない。顔ぐらゐ青くなるさ」

聞いてゐた芦屋主計大尉は、「死んで行く兵隊は天皇の名を呼ばないもんだよ」と言ひかけたが、言はなかつた。

ハムとコロッケと鮭のフライとを盛り合せ、まん中に輪切りの蜜柑を飾つた奉祝ランチは、町ではもうなかなか食べない御馳走であつた。若い士官たちはそれぞれのテーブルで賑かに話をしながら食事をつづけた。

十二時四十分になつたら、もう一度お見送りの位置に整列しなくてはならない。

二

保科主計大尉が東京を發つたのは、その雪の日から五日後であつた。羽田から飛行機で、単身マニラ經由フィリッピンのダバオに向つた。正式の赴任ではなく、彼が主計長

兼分隊長として配属を命ぜられた三十三警は、未だ只で部隊の編成中であつた。

トラックが壊滅しラバウルが孤立したあと、次期決戦に備へて聯合艦隊の新しい泊地を探してゐた海軍は、スール列島のタウイタウイ島に白羽の矢を立てた。

スール列島はボルネオとミンダナオ島との間に散在する大小六十余の島々で、列島の西端、ボルネオに近いところにタウイタウイがある。

島の実情はよく分つてゐなかつた。第三十三警備隊の任務は、とにかく此処を占領し、艦隊が当分安心して碇泊、訓練に従事出来るやうに治安を確保することであつた。

保科大尉は、ダバオで、しばらく情報蒐集の仕事をつづけた。

少しづつ様子が分つて来た。タウイタウイ島にはコーネル・スワレスといふ米国で軍事教育を受けた男の指揮するゲリラ集団がゐて、米軍に物資を補給してもらひながらジャングルの中で頑張つてゐること。島は水が乏しく、野菜等生鮮食糧品の自給は不可能であること。住民は回教を奉ずるモロ族で、性質は癡猛であること。比島人ともボルネオのインドネシア族ともちがふ。人食ひの習慣は持つてゐないが、彼らの戒律を犯せば必ず報復を受ける。土民の集落はあるが町と称するやうなものは全然無いらしい。

たいへんな任地と任務を与へられたものだと思つたが、彼は三十三警主計長を命ぜられたについて、多少思ひあたるころがあつた。

同期の芦屋大尉が統帥権問題に関する政治的なレポートを書いた時、保科はかつて自分が海南島守備隊の主計長として在勤した際の見聞と感想とを所見として軍務局長に提出したのであつた。

日本軍は、何処へ行つても軍刀と銃で現地人を服従させることしか知らないが、海南島で白人の宣教師たちのやつて来たことを調べてみると、まるでちがつてゐる。彼らは異教徒の異民族を馴化するには、教会といつしよに先づ学校と医療設備とを持ちこむ。効果といふ点では明かにこの方がすぐれてゐた。日本も大東亜共栄圏の建設を志すなら、彼らの方法に学ばねばならぬ点が多いといふ意見を書いたのである。

海軍の人事にはひどく敏速なところがある。どうも自分の「所見」が今度の転勤につながつたといふ気がした。

ダバオでの情報集めを終ると、保科大尉は一旦呉へ帰つて来た。呉では編成中の部隊が、兵器、食糧、弾薬、医療品、建設資材の調達、梱包、積み出しに繁忙を極めてゐた。軍令部と聯合艦隊司令部とは、タウイタウイ島に恒久泊地としてよほど大きな期待をかけてゐるらしかつた。最低二

年間延五万人の将兵が補給無しでやつて行けるだけの装備を用意せよといふ命令が出てゐる。

「本隊の目的は戦争をすることではない。民間人の司政官を同行しないので、任務の成否はもっぱら主計長の肩にかつてゐるものと心得て、しつかり頼むぞ」

と、保科は出発前司令の部屋に呼ばれて申し渡された。

普通なら輸送船に乗せられるところを、三十三警の将兵は戦艦大和と巡洋艦摩耶に分乗し、島風、雪風、早霜、山雲の四隻の駆逐艦に護衛されて、四月二十一日呉を出港した。

マニラで船を降りかへ、目ざすタウイタウイ島に無事人員物資の揚陸を完了したのが四月の末日であつた。抵抗らしいものはなかつた。

北がスール海、南がセレベス海に面した、北緯五度の暑い島であつた。地図の上ではボルネオ東方の小さな点に過ぎないが、実際に来てみるとずいぶん大きい。ところどころ白い砂浜が見えるほかは、全島海岸線まで一面濃い熱帯樹におほはれてをり、音に聞くスワレス中佐のゲリラ隊が何処にひそんでゐるのか、見当もつかない。

島の西南端に接してボンガオ島といふ小島がある。このボンガオ島とタウイタウイ本島にいだかれて、大きなリーフの中に艦隊泊地として如何にも恰好の静かな内海がひら

けてゐた。

ボンガオ島に無血上陸した部隊は、それから数日間にあたつて本島の掃討作戦を実施した。密林の中でモロ族の襲撃を受け、味方に数名の負傷者を出した。陸戦隊はその代償として、白い禪をしめた老人を一人と、裸の子供を二人捕へて来た。

白禪の老人はちよん髷のやうな髪を結つて日本人とそつくりの顔立ちをしてゐるが、言葉は全然通じない。保科大尉が手ぶり身ぶりで年を聞いてみると、傍の椰子の大木をさしてニターツと笑つた。「コーネル・スワレス」「コーネル・スワレス」と言ふと、うなづくけれども、それ以上はさつぱり要領を得なかつた。

次の日、腰布を巻いたやはり日本人そつくりの瘦せた年寄りが、手下らしい若者を数人連れ、舟に乗つてボンガオ島の警備隊司令部を訪ねて来た。

「主計長。あのへんな土人は片言の日本語をしやべります。どうしてもコマンドルに会ひたいと言つとります。どういたしますか？」

と衛兵の報告を受けた保科大尉は、気味の悪い思ひで直接に出てみた。老人も若者たちも、腰に蜜刀をさしてゐる。

老人は緊張してゐるやうだつたが、それでも皺だらけの黒い顔に笑みをうかべ、軽く会釈をして、

「あんたら、一体日本の何処から来なかつたのですか？」と言つた。それは片言ではなく、九州訛りのはつきりした日本語であつた。

「え？」保科は我が耳を疑ふ思ひがした。「さう言ふお前は何者だ？」

「不思議に思ひなさるのは無理もないが」と、黒い老人はつづけた。「わしは佐賀県の子で中里といふ、れつきとした日本人です。日本を離れてはや長い月日が経つて、日本語も大方忘れてしまふたが、あんたらが森の中をむやみに荒し廻つるといふので、けふは相談をしようと思つてやつて来た。この若い者らは皆わしの孫です」

驚いた保科大尉は、とりあへず老人を急造の士官室に請じ入れて事情を聞いてみることにした。

初めの口上だけはまともであつたが、こみいつた話をしようとするにつれて中里老人の日本語はたどたどしくなつた。

言葉をさぐるやうにしてぼつりぼつり語るところによると、昔々乗つてゐた真珠採りのダイバ船が難破して、乗組員のうちたつた一人此の島に流れ着き、それからもう何十年にもわたつて此処で暮してゐるのだといふことであつた。「それはいつの時代の話かね？」

保科は訊ねた。

「わしが十六の年だつた」老人は答へた。「今わしはかれこれ六十を過ぎたかと思ふが、齢のことはよう分らんです」

誕生日とか命日とか冠婚葬祭の折に、此の島の住民は椰子の実を一つ土に埋める。その椰子の成育を見ておほよその歳月の経過を知るのだと彼は説明した。白揮が椰子の木を指した意味が、やつと了解出来た。

「長い月日の間、わしは日本のことを忘れた日は一日もない。たまに日本の漁船が入つた時には、いつでも漁師らにようしてやつた。日本が今アメリカと戦争しとるといふ話も聞いとる。しかしあんたらは、何が欲しうて此のタウイタウイまでやつて来なさつたか？」

と老人は質問した。

黒い額に皺をきざみ、両眼に目やにをためたきかないなりをしてゐるが、さう思つて見れば如何にも日本人の漁師の顔であつた。

だが、いくら日本人でも、部隊進駐の目的が聯合艦隊泊地の確保にあると告げるわけには行かなかつた。

「中里さん、それはね」保科大尉は大東亜共栄圏のことを分り易く話さうと思つた。「日本はこの戦争で、アジアの国々を白人の支配から解放しようとしてゐるのです。このスール列島でも、住民が独立して平和に暮して行けるやう

に私たちは手助けに来たんですよ」

「それならコマンドル」老人は信用しかねる口調で言つた。「なぜ森の中を暴れ廻つて罪もない年寄り子供を捕へたりしなさるとか？ 子供も年寄りも、みなわしの親戚すぢの者です」

「さうか。それは悪いことをした」

保科主計長は率直に頭を下げた。中里老人は彼のことを司令官だと思ひこんでゐるらしい。保科もコマンドルのつもりで、警備隊の実施した掃討作戦はスワレス中佐のゲリラ隊を発見するためであつたこと、島民を敵視する意志は全くないので、三人の捕虜もすぐ釈放の手続きをしようとして約束した。

老人は満足さうにうなづいてみせた。

三

とにかく三十三警の駐屯目的からいつて、この珍しい人物を味方につけない手はなかつた。保科大尉は一旦ほんものの司令に相談に行き、権限を委託してもらふことにして、また話し合ひをしに戻つて来た。

「捕へた年寄りと子供は、今ここへ連れて来させて身柄を

あなたにお渡しします。さつき言つたやうな次第なので、どうか悪く思はないでいただきたい」

老人が何よりも捕虜の釈放を要求しにやつて来たことは明かであつた。

「ついでに中里さん」彼はつづけた。「その代りといふわけではないが、日本のために、これから一つ私たちの力になつてもらへないだらうか？ 教へてもらひたいことがたくさんあるのです。コーネル・スワレスについてはあなたも知つてゐるでせう？」

むろん中里老人はスワレス中佐のことを知つてゐた。会つたことはないが、アメリカ人の血の混つたモロ族きつての勇者で、右の乳の下に誓ひの入墨をしてゐる、私兵を擁して、ここからは遠い島の東部の山中にたてこもつてゐる。「コーネル・スワレスもあなたと同じことを言うところかな」と老人は話した。「わしはしかし日本人です。天子様のためになることなら、わしの顔をつぶさんかぎり、はるばる来なされたあんな方の面倒を見て上げようと思ふ」

中里はしきりに「天子様」について聞きたがつた。

自分が東京を發つ直前、天皇が海軍省に行幸になつた話をしようかと保科大尉は思つたが、ふと、この人が「天子様、天子様」と言つてゐるのは明治天皇のことらしいと氣がついてやめにした。

「中里さん。あなたさきほど孫の話をされたが、つまりこの島で結婚されたわけですね。奥さんは島の人ですか？」
中里老人は強く首を振つた。

「わしの女房は七人をります。コマンドル、この島で人に女房のことを聞いたりしてはいけん。モロ族の者は自分の女のことを聞かれただけで機嫌が悪うなる。人の女に手を触れたら首を切られても仕方がないといふのが島の掟です。アメリカの一等強いマリーンといふ鎮台が、ホロ島で女に手を出して全滅した例があるからな」

保科大尉はうなづいた。ダバオで得た情報と符合してゐた。

ホロ島はスール列島の首府で、老人の話によるとここにサルタン・オンブラといふ王様がある。妃をダヤンダヤン姫といひ、この王室が島々の酋長たちを統治してゐるといふことであつた。スール列島の島々は今フィリッピンの領土になつてゐるけれども、モロ族は氣位が高く、「フィリッピン人は猿だ」と言つて輕蔑してゐる。タウイタウイ島にも酋長が数人あるが、中でも有力なのはコーネル・スワレスの顧問をしてゐるボーボー爺さん、それからサルタン・オンブラの甥にあたるワガスといふ青年貴族、この人の階級はダトーといひ、日本なら北白川宮様のやうな人にあたる。回教の一番偉い坊さんはボーボー爺さんとアラバ

ニー爺さんで、アラバニー爺さんはイマムといふ階級に属する。よく分らないところがあるけれども、保科大尉はメモを取りながら聞いてゐた。

一つ安心したのは、此処とスワレス・ゲリラ部隊の本拠との間には深いジャングルをへだてて二十キロ以上の距離があり、どちらかが攻撃をしかけないかぎり戦鬭は起らないだらうといふことであつた。この島には島の階級社会と秩序とがあつて、治安を確保する目的からは武器を携へた巡邏兵などは出さない方が得策だと、老人は忠告した。

「住民の喜ぶ品物を与へて仲よくなるのが一番よかとやがね」

海軍警備隊の与へ得る物は、さしあたつていくらかの米と煙草と医薬品であつた。

三人の捕虜を釈放する時、保科が一袋の米を土産に渡すと、中里老人の面には抑へかねるほどの喜色あらはれた。老人は何度も礼を言ひ、翌日また連絡に来ることを約し、孫どもに舟を漕がせて帰つて行つた。

そのあとニッパ椰子の葉で葺いた小屋の中では、今後の治安対策について会議が開かれた。

第一は防諜問題であつた。土民はスワレス・ゲリラ隊と絶えず連絡があると考へねばならない。スワレス中佐はおそらく無電機と暗号書を持つてゐて、アメリカの潜水艦と

常に連絡を取つてゐるだらう。艦隊がいつタウイタウイ泊地の使用を開始するか警備隊司令部では分らないが、その時情報がすぐアメリカに筒抜けになつては困る。それを完全に防ぐためには、スワレス・ゲリラ隊を殲滅しモロ族の島民を全部監禁してしまはねばならないが、そんなことは出来る相談ではなかつた。

結局保科主計長の意見具申をもとに、艦隊が入港して来るまで三十三警はつとめて軽い任務の進駐部隊である風を装つて目立つ活動をしないこと、出ても何も面白いことは無いのだから隊員は止むを得ない場合以外ボンガオ島の陣地から一切外へ出さない、中里老人を通訳兼案内人として極力島民を手なづけるやうに努めることなどが取り決められた。

島民の宣撫工作は、保科主計長が専らこれにあたることになつた。彼は軍務局長に提出した「所見」通り、住民の病氣治療から始めようと思つた。軍医長の協力が必要であつた。

「あした中里がやつて来たら、とりあへず伝單を各部落に配らせませう。『日本から立派なドクトルが来島された。身体具合が悪くて治療を希望する者は遠慮なく申し出よう。費用は取らない。日本軍はタウイタウイ住民の健康と平和とを切に望んでゐる』といふやうなことを、土語で書いて

持つて行かせるんです。適当な場所に店をひらいて出張診療をやらうと思ふので、いつしよに来てくれませんか？」

と頼んでみたが、軍医長の萩原大尉は首を横に振つた。

「隊員の診察と手術で手一杯で、私はそんなポーポーだのアラバニーだのいふ奴を診に行くのはいやだよ。第一薬に對してどういふ反応體質を持つてゐるか分りやしないし、下手なことをしてひよつこり死なせたりしたらどういふことになるかね？ そりやあ医療といふより宣撫工作のマジナヒみたいなもんなんだから、素人の方が却つていい。あなたが適任ですよ。どうしても困つたら医務科へ送つて来れば診てやりますから、出店の方は主計長がやるんだね。薬はいくらでも出して上げます。ただしむつかしい物は使はない方がいい。仁丹とアスピリンでも持つて行けば大抵間に合ひますよ」

四

中里老人はその次の日から、秘書兼通訳としてボンガオ島の保科大尉のもとへ日参して来るやうになつた。

宿舎のニッパハウスの下に老人の舟が着くと、保科は支度をととのへて、爺さんといつしよに対岸のタウイタウイ

本島へ「仕事」をしに出かける。舟は土語でコンピースと言つた。カヌーよりずつと大きな立派な舟で、モロ族の若者が五六人、上手に櫂を操り、波の無い海上をマングローブの茂る向う岸さして勢ひよく走らせて行く。漕ぎ手の多くは、中里老人の眷族にあたる日本人の血の混つた青年たちであつた。

礁湖の水は底まできれいに澄んでゐた。海蛇や美しい色の熱帯魚が泳いでゐるのが、コンピースの上からよく見える。

島にはミンダナオ島戡定作戦當時、陸軍が砲撃で破壊して行つたといふ回教寺院の廢墟があつて、医者に化けた保科主計大尉は此処で朝の二時間ほど診療所の店開きをする。ボンガオ島の本部に蟄居してゐるのに較べれば、いい気晴しであつた。しかし、土語のちらしを各酋長のもとに配る手配もしたし、その前に中里老人が口頭で宣伝もしてくれたはずなのに、最初の三日間治療を求めて来る者は一人も無かつた。島民たちは新來の日本軍に對し、多分に疑惑をいだいてゐるらしかつた。

かういふ所で日本式のせつかは禁物だと思ひ、保科大尉は折椅子の傍に目立つやうに薬品箱を置いて、魚釣りでもしてゐるつもりで根氣よく待つことにした。

中里の爺さんは、七人の女房に生ませた子供が十三人、

孫の数は二十何人かこのごろうまく勘定出来ないなどの上話を聞かせてくれたりした。

四日目になつて、やうやく患者の第一号がやつて来た。

それは全身の潰瘍に膿をため、その上マラリヤと思はれる高熱に冒されて、立つてゐるのも苦しうな、きたない腰巻の男であつた。

「どうした？」

保科大尉は聞いた。

「身体中がだるく苦しい」

病人は中里老人を介して答へた。妙に光る眼でキョロキョロあたりを見廻し、怯えてゐる。

保科が仔細らしく臉をひつくりかへしたり脇腹をさぐつたりすると、その度にギクリとした。

先づ落ち着かせてやらうと、保科は「櫻」の箱を出し、自分も一本火をつけ相手にも差出してみた。患者はまたしてもびくつとしたが、次の瞬間乱暴にそれをひつたくると、口に入れて噛みはじめた。

「おいおい、そりや噛み煙草ぢやない。食つちやいかん」

保科はとめたが、中里の爺さんは、

「大丈夫です。この連中は煙草ぐらゐ食うても障りはおとさんとです」

と平氣なものであつた。

土民たちが遠巻きに、檳榔樹の実を噛んで赤い唾を吐きちらしながらニヤニヤ眺めてゐる。

彼らは日本軍のえらい医者と称する人間が一体どんなことをするか、死にかけの仲間を一人送りこんで様子をうかがつてゐるやうに思はれた。

「お前はこの身体で誰に看病してもらつてゐる？ 家族はあるのか？」

「家族というても嫁はをらんです。母親がこれの世話をしてくれとるさうです」

中里の爺さんが患者に代つて答へた。

初め三十を過ぎた男かと思つたが、よく見るとあどけない顔をしてゐて、未だよほど若いらしい。

注意してゐたつもりだつたが、潰瘍の膿が手についた。氣持が悪く、アルコール綿で消毒しながら、それでも可哀さうな氣がして、

「よしよし。これだけの潰瘍にこの熱では苦しいだらう。今お前に、日本から持つて来た上等の薬をやるからな」

と、保科大尉は穩かに言つた。

氣持は通じるらしく、病人の態度はいくらか落着いて来た。

熱帯性潰瘍にはビタミン剤を投与するのがいいと聞いてゐる。彼の医学知識ではどの種のビタミンが効くのか分ら